

デジタルハリウッド大学
2020年度 一般入学試験 B方式

国語 [60分]

【 注 意 事 項 】

1. 試験監督の指示があるまでは、問題冊子は開かないこと。
2. 試験監督から指示があったら、解答用紙に氏名・受験番号を正確に記入し、受験番号マーク欄にも受験番号を正確にマークすること。
3. 試験開始の合図後、この問題冊子を開き、36ページ(白紙ページ含む)揃っているか確認すること。
4. 乱丁、落丁、印刷不鮮明などがある場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
5. 解答は、すべて別紙の解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 試験開始から終了までの間は、試験教室から退出できません。
7. 不正行為を行った場合は、その時点で受験の中止と退室を指示され、同日受験したすべての科目の成績が無効となる。
8. 解答用紙は試験終了後、回収される。問題冊子は持ち帰っても良い。

第一問 次の小説の一節を読んで、後の設問に答えなさい。

テンは中学・高校の野球部でエースをつとめ、プロを目指すほどの優れた選手であったが、事故で右手を失い、義手をつけて生活している。チームメイトの晃平こうへいがテンの代わりにピッチャーとなったが、練習に雑用係として参加しているテンに、ある日、邪魔だから来るなど言ってしまう。

濃霧の中、滑走路のような一本道を走り、テンの家を目指す。思いきりペダルを踏めば十五分ほどで着く距離だったが、七月に収穫を迎える玉葱たまねぎの畑をのんびりと眺めながら走る。土から伸びた緑色の葉が視界いっぱいになり、きれいだっただけでなく、もう練習に来るなど口にしたきり、テンとは顔を合わせていない。携帯を持たないテンとのやりとりは自宅の電話だけだが、その電話をかけるのも躊躇ためらわれた。

今日は、野球部恒例の佐呂間神社さろまへの必勝祈願をする日だった。「一緒に行ってほしい」と、テンに頼むつもりでいた。

「おっす」

滑るように道路を走っていた晃平は、突然降ってきた声に慌てて急ブレーキをかける。

「テンか？」

畑の中から鮮やかなブルーのジャージを身につけたテンがぬっと姿を現した。

「こんな早くに何してるんだ？ 散歩？」

屈託ないテンの声と表情に、頭の中で練ってきた謝罪の言葉を忘れてしまう。

「おまえこそ何してんだ」

明るく笑えるテンに対して、①仏頂面のまま言葉を返す。

「おれ？ おれは親父おやじに畑見て来いって言われたから。夏になると病虫害の害があるからな。ほら、これ小菌核病しょうきんかくびょう。葉に発生するんだ。葉の先つぽや真ん中から広がって、最後は枯れてしまうんだ。葉つぽが枯れると収穫量が落ちるからさ、病気が広まらないうちに手を打たないとな」
黄色のコンテナに茶色くなった葉を放り入れると、テンはまた「どうしたんだ」と訊きいてくる。

「今日さ……必勝祈願に行くんだ、大安なもんで」

「おお。そうかあ。そうだな、そろそろ行かねえとな」

「それで、おまえも……一緒にと行って」

「おれ？ おれが行くのか？ 部外者だぞ」

テンが拗すねた口調になる。

「いや、だから……」

両手を膝に押しつけ、晃平は深く腰を折った。

②その姿勢はなんだ、とテンは笑う。誰の真似まねだ？

テンはまたしゃがみこむと、茶色くなった葉を見つけてはハサミで摘み取り、コンテナに集める作業を始める。

「また練習、顔出せよ。部外者なんて、思っおもってねえよ」

左手だけで器用に作業を続けるテンを、晃平が見下ろす。

「でもおまえが邪魔まじまじって言ったんだぞ」

「邪魔じゃねえよ」

③顔を上げたテンが訝しげに首を傾げる。

「……そんなことじゃなくて」

本当は、テンに雑用などさせたくないだけだ。グラブをはめずにボールも握らずに働いているのを目にするのが苦しいだけだ。でも晃平の真意は伝わらない。

「何時から？ 必勝祈願」

テンが立ち上がった。額にはじつとりと汗が滲んでいる。

「九時に佐呂間神社前集合。終わってから学校戻って練習」

「用意してくるわ」

コンテナを小脇に抱え、テンが駆け出そうとしたので、晃平は引き止める。家まで自転車の荷台に載せてやると顎をしゃくると、テンが「ラッキー」と笑う。

サロマ湖の沿岸を通る国道二百三十八号線を、自転車で西に向かう。九時までにはまだ時間があるので散歩して行こうとテンが言い出したからだ。

「どうだ？ 晃平んところは」

車輪をカラカラと回しながら、テンは余裕の手放し運転をしている。一輪車に乗るみたいにして何キロも止まらずに走り続けることが、子供の頃からのテンの特技だった。

「どうして？」

「ホタテ。湖への放卵始まったのかよ」

「ああ。もう始まった」

六月になると、晃平の父は他の漁師たちとともにホタテ貝の卵を湖に放つ。そしてその二カ月から三カ月後に稚貝に育ったものを採取するのだ。採取された稚貝は細かい網目のカゴの中に大切に保管され、それから翌年の五月頃まで湖の中へと沈められる。湖の中で稚貝たちはおよそ四センチ前後の大きさまで育ち、そしてそれから再び今度はオホーツク海に放流される。

「昨年沈めたぶんは？ うまく育ってたか」

「例年通りだつて父ちゃんは言ってたけど」

「海で何年待つんだっけ？」

「三年くらいかなあ。四センチの稚貝が十センチを超えるようになるまで、けつこうかかるから」

「相変わらず長えな。大変な仕事だな」

「いや。おまえんちの玉葱も大変だろ」

さつきより明るくなってきた北の空を見ながら、晃平は**呟く**。日本の北端に生まれ、海や湖や雪や土や草花を見ながら育ってきた。流氷の季節になると、北の海から流れてくる氷の上にキタキツネが乗っていて、そのキツネたちを眺めるのが小さい頃の楽しみだった。風の音や空気の匂いを嗅ぎ分けて「そろそろ帰るか」と子供たちは家に戻る頃合を知る。**④風景の中に人が少ないから、よけいに人が大切に思えた。手を伸ばすと届く距離にいる人たちすべてが自分の味方で、だから両親には土地の人全員を家族だと思えと教えられた。農家をしているテンや、漁師のうちや、乳牛を飼う同級生たちの家族はそれぞれ大変だったけれど、みんな平然としている。自分たちの生まれを嘆くようなことはな**

かった。

でも、テンみたいに……人にはない何かを持って生まれきた人間は、ここを飛び出していくのだと信じていたのだ。この町に生まれ育った強さを持って飛び出して行ってほしい。そうしたらここに残って生きていく自分ももっと、強くなれるような気がした。

「晃平。玉葱は一年、ホタテは三年だ。時間かけなきゃしょうがないこともあるぞ」

道端に落ちていた石を避けるためにバランスを崩し、慌てたテンが左手でハンドルを握る。

「ピッチャーに転向してまだ一年も経ってないんだぞ、おまえ」

体の重心を左に移し、テンは体を斜めに傾けるようにしている。

「おまえの（注）ノート、読んだよ」

「あ。読んじやった？」

「おれの軌跡って、なんだあれは」

「すげえだろ？」

「こええよ。誇大妄想」

テンの掠れた笑い声に、言葉を重ねる。

「⑥それになんだよ。あんなにこそこそ自主トレしやがって」

「こそこそなんてしてないぞ」

「おれ知らなかったし」

「毎日ランニングとか、誘っても晃平しないだろ。練習嫌いだし」

「しないけど、隠すなよ」

「だから隠してないって。おれはピッチャーだったからな。コントロールは下半身が強くないと安定しないんだ。だから、走ってたただけだ」霧が晴れてきて気温が少しずつ上がっていくのを感じていた。すぐ先に富武士の（注）ピラオロ台が見えてきた。休憩するか？ と晃平が訊くとテンは首を振る。正直なところ自分が休みたかったのだけれど、悠々と前を走るテンの背中を見ているともうひと頑張りするかと思う。生まれてから百回以上も上ったはずのピラオロ台からは、オホーツク海との境に位置する原生林まで見渡せる。原生林は、湖と海を区切る砂丘の上であり、この季節は緑と赤の彩りをみせる。

二人が神社に着いた時、部員はすでに全員集合していた。高林と福地が口元を緩めて意味深な視線を送ってくるのを、

「さっそく行くか」

とやり過ぎし、一列になって境内に続く長い階段を上がった。爽やかな風が樹木を揺らし、その涼やかな音の合間に鳥の鳴き声が聞こえてくる。

境内に入ると、横一列になり十九人が合わせて拍手を打つ。俯いたまましばらく静かにそれぞれの思いを神様に告げた。一試合でも多く、投げさせてください。勝たせてください。晃平はそう祈る。隣で頭を垂れるテンが何を祈っているのかすごく気になっていたけれど、訊くことはしなかった。

「よし。じゃあ絵馬の奉納に行くか」

高林の景気の良い声にきれいな直線だった列が崩れ、持参してきた油性ペンを手にわれ先にとみんなが駆け出す。

晃平は絵馬の中央に『必勝祈願』と大きく書く。文字にすると、

⑥

、少し躊躇した後、周りに人がいないのを確かめ「必勝祈

願」のすぐ隣に、

『テンの手をください』

と小さく添えた。誰にも見つからないように、文字を手で覆い、重ねて掛けられた他の絵馬の一番下になるように奉納し、もう一度空に祈る。

(藤岡陽子「テンの手」『波風』所収より)

(注1) ノート——テンの自主トレーニングメニューや、プロ野球で活躍する未来予想図をつづったノート。

(注2) ピラオロ台——サロマ湖を見渡せる展望台。

問1 傍線部①「仏頂面のまま言葉を返す」とあるが、「仏頂面」をして言葉を返した晃平の心情はどのようなものだと考えられるか、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア 自分とは対照的に、先日のいさかいを少しも意に介していないテンの様子を不満に思っている。
- イ 普段通りの態度で接してくれるテンに対し、申し訳なさや気まずさから素直になれないでいる。
- ウ 怒ってくれた方がいっそ楽なのだと思います、明るい態度で接するテンに対し恨めしく感じている。
- エ あまりに自然なテンの態度を見て、最近の気まずさや謝罪に來た事実を忘れ拍子抜けしている。

問2 傍線部②「その姿勢はなんだ、とテンは笑う。誰の真似だ？」とあるが、このときのテンの心情はどのようなものだと考えられるか、

ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア 晃平の謝罪の気持ちを理解しながらも、謝罪の気持ちを言葉で表さず失礼な態度をとる晃平に呆あきれている。
- イ 晃平が訪ねて来た理由が気になりながらも、大げさな晃平の態度に驚き、からかう気持ちが先に来ている。
- ウ 予期せぬ晃平の行動に困惑し、自分の拗すねた言動が、晃平を追い詰めてしまったことに動揺している。
- エ 口に出せずにいる晃平の謝罪の思いを汲くみ、おどけて振る舞うことで気持ちを軽くさせてやろうとしている。

問3 傍線部③「顔を上げたテンが訝しげに首を傾ける」とあるが、テンが「訝しげに首を傾け」たのはなぜか、ア～エの中から選んで答えなさい。

ア 晃平がテンを誘いに来てくれた気持ちは嬉しく思うものの、練習場でテンの姿を見るのがつらいという気持ちまでは気づけずにいるため、腑に落ちない気持ちでいるから。

イ 晃平がテンのことを心配してくれていることは理解できるものの、言葉足らずなために晃平の真意が理解できず、一見すると矛盾した晃平の態度に不満を感じているから。

ウ 晃平がテンを練習に來させたくない理由はわかっているものの、事故のことを乗り越えようと努力しているテンを理解せず、余計な気を回す晃平に疑問を感じているから。

エ 晃平がテンを邪魔だと思っていないとわかり安心したものの、雑用係として練習に参加し、未熟な晃平の練習を見ているだけのテンへの苛立ちまでは捉えきれずにいるから。

問 4 傍線部④「風景の中に人が少ないから、よけいに人が大切に思えた」とは、どういうことを言おうとしているか、ア～エの中から選んで答えなさい。

ア 広すぎる大地の中、不便な田舎の生活を支え合って暮らしてきたので、互いに依存する気持ちが強く、誰か一人を欠いても生活が成り立たないということ。

イ 人口密度の低い土地柄だけに風景はもの寂しく、動物の姿を眺めるくらいしか楽しみがないため、人の姿を見かけることで非常に勇気づけられたということ。

ウ 雄大な自然の中で暮らす人たちの結びつきは人の数が多くないだけに強いものであり、互いをかけがえのないものと思つて支え合つて育ってきたということ。

エ どこまでも広がる風景の中、自然を相手にした仕事はつらいこともあつたが、そこで生きる人々はその暮らしを受け入れ、協力して生活していたということ。

問5 傍線部⑤で「あんなにこそこそ自主トレしやがって」と言ったときの晃平の説明として**適当ではないもの**を、ア～エの中から選んで答えなさい。

ア 生まれつきの才能に恵まれているのだとやらやましく思っていたテンが、人知れず自主トレをしていたと知り、驚いた気持ちを屈折した表現でぶつけている。

イ 親しい自分にも隠れてテンが自主トレをしていたと知り、裏切られたような思いを味わうとともに、自分も誘ってほしかったと恨めしく思う気持ちでいる。

ウ テンの努力や抱いていた夢を思うと、彼が事故のために突然野球を奪われてしまったことを改めてつらく感じ、そのやりきれなさからひねくれた言葉を口に出している。

エ ピッチャーになっても思うように投げられず焦っていた自分を省み、着実に努力を積み重ねていくことが自分にも必要なのではないか
と思い始めている。

問 6 空欄 ⑥に入る表現として適当なものを、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア 凝り固まっていた想おもいがすべて霧散していき
- イ うっすらとした想おもいがくつきりとした輪郭を持ち
- ウ 心に秘めていた想おもいが曖昧な形へと滲んでいき
- エ 万感の想おもいが複雑な色調に彩られていくように

問 7 傍線部⑦「もう一度空に祈る」とあるが、このときの晃平の心情はどのようなものだと考えられるか、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア テンの励ましを受けて迷いがなくなり、テンのために少しでも試合を勝ち進まなければという悲壮な決意を固めている。
- イ テンの自主トレを知り、自分も努力すればテンのようになれるのだという自信を得て、晴れやかな気持ちになっている。
- ウ テンが投げられないのなら自分にその才能を受け継がせてほしいと神に願いながら、そんな自分を後ろめたく思っている。
- エ テンの思いを引き継いで投げていきたいという意思が明確になり、自分に力を与えてほしいとひたむきに願っている。

問8 本文に見られる文章の内容や表現の説明として適当ではないものを、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア テンに会いに行った場面での晃平の言葉に「……」が多用されているのは、晃平の自信のなさや優柔不断な性格を表現している。
- イ テンが晃平に成長にかかるホタテ漁の話をしたのは、ピッチャーとして結果を出せずに焦る晃平を案じたためだと考えられる。
- ウ サロマ湖や流水、キタキツネといった景物の描写を通して、晃平やテンの育った土地の環境や二人の結びつきを印象づけている。
- エ 霧が晴れ、爽やかな風の吹く神社に辿り着く情景の描写が、晃平の心からもやもやしたものがなくなっていく様子を暗示している。

第二問 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

(注^①) ルーマンは膨大な数の著書と論文を残し、一九九八年にその生涯を閉じた。九〇年代の後半といえ、一九九五年にマイクロソフト社のOS(オペレーション・システム)であるWindows95が発売されたのを機に、インターネットがしだいに私たちの生活へと浸透しつつある時代であった。(注^②) 大黒は「ルーマンは、インターネットという新しい(メディア)の登場を目の当たりにして、(次)なる社会構造、すなわち^③ポスト「^④機能的分化」構造の^⑤胎動を予感したはずである」と言う。しかし残念なことに、ルーマンが社会システム理論の観点からインターネットを分析することは、時間が許さなかった。われわれはこのルーマンがやり残した課題を引き受け、社会システム理論を適用してインターネットがどのような特徴をもつコミュニケーションなのかを明らかにしたい。

インターネットのコミュニケーションを全体社会の(注^⑥)サブシステムとして分析しようとするなら、当然、このシステムで働く(注^⑦)バイナリー・コードは何であるかが問われなければならない。われわれは^⑧インターネット・システムのバイナリー・コードは「接続/非接続」である^⑨と考える。ここで言う接続とは、伝達された情報に対してなんらかの反応(レスポンス)を誘発する作用を意味する。このコードの特質を明らかにするために、マスメディア・システムのコミュニケーションと対比してみよう。

マスメディア・システムにおいては「情報/非情報」というバイナリー・コードによる観察が行われ、新奇性や時事性をともなう情報が伝達されるわけだが、受け手がそうした情報をどのように理解しているのかを送り手が把握することは難しく、把握できたとしてもそれには大幅な時間を要する。このシステムの受け手は送り手と情報が伝達される時空間(コンテキスト)を共有しない不特定多数であり、また情報に対する反応を即座に示すことも容易ではないからである。^⑩ こうしたマスメディア・システムの特徴は、コミュニケーションの「接続」という点ではむしろ有利に働く。^⑪ 送り手は受け手が情報を正しく理解しているか、好意的に受け止めているかといったことを気にする

ことなく、次々と新しい情報を伝達することができるからである。⑥ 受け手の理解が不確かであるがゆえに、「マスメディア・システムはコミュニケーションの接続の連鎖を途切れさせることなく存続を維持できる」のである。このようにマスメディア・システムにおいては、コミュニケーションの「接続」が問題として顕在化することはない。

これに対してインターネットにおいては「いかにしてコミュニケーションを連鎖的に接続させるのか」という問題が顕在化する。たとえば「5ちゃんねる」のようなネット掲示板に書き込みをするといったケースを考えてみよう。最初にスレッドを立てるときに最も重要なのは、次の書き込みを誘発するような書き込みをしなければならない、ということである。後続の書き込みがなされないと、書き込みの連鎖を構成要素とするというネット掲示板の特質上、そのスレッドは（ひいては掲示板そのものが）死んでしまうことになるからだ。（Ⅰ）

そう考えるとインターネットのコミュニケーションは、会話のような対面的な相互作用と似た特質を有していることが見えてくる。マスメディア・システムにおいて重要なのは⑧であった。人びとの興味関心をそそるような情報を次々と伝達することこそがマスメディアの働きである。これに対して対面的状況下の相互作用においては⑧は相対的に低下するとともに、⑨が上昇する。なぜなら、そうした状況では「何も言うことがなくても、何かを話さなくてはならない」からである。会話が途切れてしまい気まずい思いをしたという経験は誰にでもあるだろう。会話のような対面的相互作用にあつては、情報の内容は何であれ、とにかく伝達し続けること、言い換えれば接続の連鎖を絶やさないとこそが、このコミュニケーションにとって最も重要なことなのである。（Ⅱ）

だとすればインターネット・システムは、会話のような相互作用と同質のコミュニケーションであると見なしてよいのであろうか？ 接続志向のコミュニケーションの特殊形態がインターネットなのか？ たしかに接続（伝達）の問題が顕在化するという点でインターネットと相互作用は共通点をもつ。しかし情報価値という観点から見ると、これら二つのコミュニケーションの性質はまったく異なっている。ポイントとなるのは情報が伝達される⑩受け手の特質である。会話のような対面的相互作用において情報の受け手となるのは、通常、既知の特定の他者

である。それゆえ何を話題として提供するかという情報選択を行う際——それは会話を途切れさせないような情報でなければならない——、これまでのコミュニケーションの履歴から相手の興味関心に合った情報を選ぶことは比較的容易である。対して、ネット掲示板のようなコミュニケーションにあつては、受け手はつねに不特定多数である。もちろん〇〇板、××板といったように主題によって掲示板の種類は分けられているが、ネット環境が整っている限りあらゆる人がネット掲示板にアクセスすることができる。この意味でインターネットのコミュニケーションはマスメディア・システムと共通点を有していると言える。(Ⅲ)

このことは情報の選択という点でも、インターネット・コミュニケーションにマスメディア・システムと同様の問題をもたらす。マスメディア・システムが情報／非情報というバイナリー・コードを用いて観察を行う際、そこで選択された情報はただの情報であつてはならず、新奇性や時事性といった特性が必要とされることはすでに確認した。これは受け手が不特定多数であるため、誰しもが興味関心を持ちやすい情報を伝達しなければならないからである。このことはインターネットにも当てはまる。インターネットも情報の受け手は不特定多数であるため、意外性や新奇性をともなつた情報を伝達することが必要となる。

しかし^⑧インターネット・システムとマスメディア・システムの類似性はここまでである。マスメディア・システムのプログラムの一つであるニュースとルポルタージュにおいて情報を選択し伝達する際、そこに大きな制限がかけられていた。それは伝達された情報が「真実」でなければならぬということである。ニュースとルポルタージュには、「意外性」「時事性」「規則違反」といった基準のみならず、それが真実であるか否かという観点からも情報／非情報の選別を行うことが求められているのだ。これに対してインターネット・システムにとって真実／非真実という区別はさして重要ではない。なぜか——インターネット・システムでは接続／非接続の区別の方がはるかに重要だからである。インターネットの場合、マスメディア・システムのように真実の情報を伝達し続けるだけでは、システムは回らない。真実をいくら書き込んだとしても、後続のコミュニケーションが接続しなければこのシステムは作動を停止してしまうからだ。インターネットにときに目を覆いたく

なるような差別的な発言や扇情的な物言いが横溢する^{おういつ}のは、そうした情報は感情に訴えかけることで読み手の反応（共感であれ、反感であれ）を喚起し、次なるコミュニケーションの接続を容易にするからである。逆に、誰もが知っている正しい情報（真実）は反応のしようがなく、コミュニケーションの流れを阻害するため、インターネットにおいては流通しにくい。^④悪情報は良情報を駆逐する（Bad information drives out good.）——ポスト真実の時代の^{（注6）}グレシャムの法則である。（IV）

インターネットにおいて真実ではない情報が流され、共感や反感をともないながら瞬く間に流通するのは、これまで見てきたようなインターネットに固有のコミュニケーション特性によるものである。まとめると、接続／非接続をバイナリー・コードにしなから情報の選択を行い、そうして選ばれた新奇性や意外性をともなった（かならずしも真実ではない）情報が不特定多数の他者に向けて伝達され、それに対する反応として接続／非接続の観点から選択された情報が不特定多数の他者に伝達され、さらにそれへの反応として……といった^⑤再帰的な構造をもつコミュニケーション・システム、それがインターネット・システムである。その意味でインターネットはポスト真実の時代ときわめて親和性の高いメディアであると言えるだろう。

（名部圭一^{なべけいいち}「ポスト真実の時代のメディア」^{みなみでかずよ}へ南出和余・木島由晶編『メディアの内と外を読み解く』所収）より。

出題の都合上、本文中に一部省略した箇所がある

（注1）ルーマン——ドイツの社会学者。システム間の階層性がない社会構造の概念を著した『社会システム理論』を発表した。

（注2）大黒——大黒岳彦^{だいこくたけひこ}。主な著書に『（メディア）の哲学——ルーマン社会システム論の射程と限界』がある。

（注3）機能的分化——ルーマンの唱えた、社会構造の分化方式の一つ。職業などの社会的役割により、社会階層に分化する考え方。

（注4）サブシステム——大きなシステムの一部を構成するシステム。またはあるシステムの代替や補助の役割を果たすシステム。

（注5）バイナリー・コード——コンピューターが解釈して、実行することが可能なプログラムの形式で、「A／非A」という区別からなる。

(注6) グレシャムの法則——イギリスの財政家グレシャム(一五一九—一五七九)が唱えた「悪貨は良貨を駆逐する」という法則のこと。

問9 傍線部①の本文中での意味として適当なものを、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア 何らかの価値の重要性を、伝達する機能を果たすもの。
- イ 社会において、あるものに代わりその位置につくもの。
- ウ 大衆を一定の方向へと誘導し、変化させる働きをするもの。
- エ 抽象的概念を、人びとに喧伝けんてんするための象徴となるもの。

問10 傍線部②「胎動」の漢字の読みを、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア たいどう
- イ だいでう
- ウ ていでう
- エ でいでう

問11 傍線部③「インターネット・システムのバイナリー・コードは『接続／非接続』である」とはどういうことか、ア～エの中から選んで答えなさい。

ア 不特定多数の人が用いるインターネットにおいては、受け手とのコミュニケーションの接続がない状態でも、システムが成立してしまいう可能性があるとということ。

イ インターネットにおいては、情報の受け手の反応を途切れさせずに連鎖させていくことが何よりも優先され、そういう観点で情報が選択されていくということ。

ウ 受け手の反応をあまり気にする必要がないインターネットにおいては、コミュニケーションが続けばそれでよいと考え、しんびょう信憑性などが疎かにされがちだということ。おろそ

エ インターネットの世界では、情報の受け手がそこに接続しようと働きかけて初めてシステムが機能するため、送り手からの一方的な情報伝達はありえないということ。

問 12

空欄

④

⑤

⑥

に入る語の組み合わせとして適当なものを、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア ④ しかし ⑤ なぜなら ⑥ さらに
- イ ④ とはいえ ⑤ そして ⑥ すなわち
- ウ ④ だが ⑤ というのも ⑥ つまり
- エ ④ そして ⑤ いうならば ⑥ だから

問 13

傍線部⑦「マスメディア・システムにおいては、コミュニケーションの『接続』が問題として顕在化することはない」とあるが、この

理由として**適当ではない**ものを、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア 情報の送り手であるマスメディアは、受け手の顔や情報に対する即座の反応がなかなか見えにくい構造にあるから。
- イ 送り手が、新奇性や時事性などの価値があると判断したものを情報として発信していくのがマスメディアであるから。
- ウ 情報の受け手と送り手と同じ時空間にいないことが殆どであり、生の情報が受け手に伝達されるのに時間がかかるから。
- エ 伝達のシステムが受け手との相互作用の形をとっていないため、一方的に次々と情報を送り続けることが可能であるから。

問 14 空欄 ⑧・⑨に入る語の組み合わせとして適当なものを、ア～エの中から選んで答えなさい。

- | | | |
|---|---------|---------|
| ア | ⑧ 情報の精度 | ⑨ 会話の精度 |
| イ | ⑧ 情報の価値 | ⑨ 伝達の価値 |
| ウ | ⑧ 接続の頻度 | ⑨ 会話の頻度 |
| エ | ⑧ 真実の確率 | ⑨ 接続の確率 |

問 15 次の一文は、本文中の（Ⅰ）～（Ⅳ）のどの部分に入れるのが適当か、ア～エの中から選んで答えなさい。

インターネットにおいて「接続」がクリティカルな問題として浮上するというのは、このような意味である。

- | | |
|---|-----|
| ア | （Ⅰ） |
| イ | （Ⅱ） |
| ウ | （Ⅲ） |
| エ | （Ⅳ） |

問 16 傍線部⑩「受け手の特質」とあるが、会話とインターネット・システムにおける「受け手の特質」の違いの説明として適当なものを、ア～エの中から選んで答えなさい。

ア 会話における情報の受け手はコミュニケーションを途切れさせないよう努力するが、インターネット・システムにおいては一方的な情報の享受者になる。

イ 会話における情報の受け手は話題にすべき内容を選びやすい関係性にあることが多いが、インターネット・システムにおいてはそれが困難である場合が多い。

ウ 会話における情報の受け手は友人など嗜好しこうが同じ相手であるのが普通であるが、インターネット・システムにおいては面識のない他者であることが一般的である。

エ 会話における情報の受け手は特定の個人など少数人数を想定しているが、インターネット・システムにおける情報の受け手は、世の中の多数派を想定している。

問17 傍線部⑩「インターネット・システムとマスメディア・システムの類似性はここまでである」とはどういうことか、ア～エの中から選んで答えなさい。

ア インターネット・システムもマスメディア・システムも、情報に新鮮さや意外性が必要であることは変わらないが、後者は情報の真実性も保証されている点で、前者より優れているということ。

イ インターネット・システムもマスメディア・システムも、不特定多数の人びとに対して情報を発信するという点は共通しているが、前者は後者に比べて、より意外性を求める特徴があるということ。

ウ インターネット・システムもマスメディア・システムも、新奇性や真実性を追い求める姿勢は共通しているものの、前者は歴史の長い後者と比較するとまだ質的に及ばない状態であるということ。

エ インターネット・システムもマスメディア・システムも、多数の人びとを引きつける情報を届けようという気持ちは共通しているが、前者はより優先するものがあるという点で違っているということ。

問 18 傍線部⑫「悪情報は良情報を駆逐する」とあるが、「駆逐する」ことになるのはなぜか、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア 不特定多数の人の反応を誘発する情報は流通しやすいが、真実は反応を生じさせづらいから。
- イ 真実ではなくても刺激的な情報の方が印象が強いため、退屈な情報を忘れさせてしまうから。
- ウ 真偽性よりも新鮮で目新しい情報であるかどうかの方が、現代社会では価値を左右するから。
- エ 真実でない情報の方が不特定多数の人を引きつけ、逆に真実だと信じられるようになるから。

問 19 傍線部⑬「再帰的な構造」とあるが、インターネット・システムが「再帰的」と表現されているのはなぜか、ア～エの中から選んで答えなさい。

- ア 発信された情報に対してのレスポンスが、新たな情報となる形で次々と受け継がれていくから。
- イ もとの情報だけでなく、それに対する反応に対しても、際限なく価値を試され続けるから。
- ウ 一つの情報がたくさんさんのレスポンスを生むことで、派生して急速に世の中に広まっていくから。
- エ 発信された情報に対し、受け手からの様々なレスポンスが送り手のもとに戻ってくるから。

問20 次の四人の発言は本文の内容についてなされたものである。本文の趣旨からみて適当なものを、ア～エの中から選んで答えなさい。

ア インターネットはマスメディアと違って、情報を相互にやりとりする関係にあることが特徴だと述べられているね。私もメールやチャットで友達とやりとりすることが多いから、筆者のインターネットに対する考え方には、妙に納得しちゃったな。

イ そうかなあ。僕は特定の人とネット上で会話するチャットのようなものではなくて、いろいろな人が読むネット掲示板のようなもの。思い浮かべたよ。次々に情報を発信することができ、受け手の反応を気にする必要がないのは、インターネットのよい点だね。

ウ 私は、二人とちよつと違う読み方をしたよ。インターネットでは、皆が興味を引かれるような話題を選ぶ必要があると、繰り返し書かれているよ。対照的に思われがちだけれど、実際はマスメディアとの共通点が多いということ、いちばん言いたいんだと思う。

エ マスメディアも情報の意外性を追い求めていると書いてあるしね。ただ共通点よりも相違点の方に重点が置かれている気がするな。そのうえで、インターネットは現れ始めている時代の傾向に合っていると筆者は考えているんだよ。

第三問 次の設問に答えなさい。

問21 次の慣用句の正しい意味はどれか、ア～エの中から選んで答えなさい。

一石を投じる

ア かるうじて反撃する

イ ひどい目に遭わせる

ウ 周りを仰天させる

エ 議論を呼びおこす

問22 次の熟語の対義語はどれか、ア～エの中から選んで答えなさい。

傍観

ア 達観

イ 無視

ウ 介入

エ 直視

問 23 次の二つの四字熟語の□に共通して入る漢字はどれか、ア～エの中から選んで答えなさい。

泰然□若

□家撞着

ア 自

イ 字

ウ 地

エ 時

問 24 次の故事から生まれた故事成語はどれか、ア～エの中から選んで答えなさい。

戦いに負けた国の国王が報復を誓い、あえてつらさを味わうことで屈辱を忘れないようにした。

ア 臥薪嘗胆 がしんしょうたん

イ 吳越同舟

ウ 孟母三遷 もうぼさんせん

エ 四面楚歌 しめんそか

問25 次の故事成語の正しい意味はどれか、ア～エの中から選んで答えなさい。

李下^{りか}に冠を正さず

- ア 美しい自然は、人の心をくつろがせてくれるということ。
- イ 風流を愛する心は、勉強を好む心とは一致しないということ。
- ウ 疑惑を持たれるような行いは、慎むべきであるということ。
- エ 人生ははかなく、あっという間に過ぎてしまうということ。

